

『論理学研究』におけるふたつの反心理主義

——植村玄輝『真理・存在・意識：フッサール『論理学研究』を読む』を読む——

富山 豊
(東京大学)

はじめに

植村玄輝氏の著書『真理・存在・意識：フッサール『論理学研究』を読む』は、副題にある通り、フッサールの『論理学研究』において展開されたプロジェクトをテキストと背景証拠に基づいて綿密に検討したものである。その多くの主張は慎重に検証されており、また注意深い留保のつけられたものであるため、力点の置き方や引き出してくる議論の選択に好みの差はあれ、明確な異論・反論を提起するのは困難であろう。植村の選択と異なる視点からの再構成によって、私なりのフッサール像をぶつけることも興味深い挑戦であるが、その課題は私自身の成果として独立の機会に提出すべきものである。そこで本稿では、植村の主張に対して比較的はつきりと異議のある論点をふたつ取り上げ、その二点について解釈と評価の二面から質問と提案を行いたい。その二点とは、

- (1) 『論理学研究』第一巻における心理主義批判において、論理法則の正当化にまつわる循環の問題はどのように考えられているか。そしてそれは心理主義批判全体の解釈にどのように関わるか。
- (2) 『論理学研究』第二巻における志向的对象と超越的对象の同一視というテーゼ(同一性テーゼ)は、どのような根拠で主張されているか、またその否定は果たして可能なのか。

というふたつの論点である。後者の主張は、フッサールにおいては志向的对象概念の脱心像化という文脈で提出されており、したがってこのふたつの主張は『論理学研究』の屋台骨を貫くふたつの「反心理主義」であると言える。このふたつの主張の眼目とその主張の根拠がどこにあるのかを正確に見定めることは、『論理学研究』でフッサールが何をしていたのかを明らかにするうえで極めて重要な作業である。

1. 『論理学研究』第一巻の心理主義批判と論理学における循環の問題

心理主義者へのフッサール自身の批判が論点先取を犯しており論証として有効でないのではないか、という疑念を提示した上で、フッサールからより強力な反心理主義論証を取り出すべく、反心理主義者からの心理主義批判としてよくある議論(とフッサール自身が述べているもの)として植村は以下の形の議論を取り上げる。

大前提：

学問は合理的な思考によって進められる。ある思考が合理的でありうるためには、それがしたがうアプリアリな規則として論理法則が先立たなければならない。論理法則は学問においてなされる合理的な思考につねに先立つ前提、つまり、合理的思考の可能性の条件なのである。したがって論理法則は、あらゆる学問の可能性の条件でもある。(植村, 2017, p. 56)

小前提：心理学も学問である以上、推論を経て認識を獲得している。

結論：推論の前提である論理法則を心理学の認識によって基礎づけるのは循環。

したがって、論理学は心理学によって基礎づけることはできないのであり、心理主義者は誤っているのであると。

しかし、心理主義者は、「論理学も学問である以上、それなら論理学自身も循環するのでは」と反論する。上の論証の「心理学」の部分「論理学」に置き換えてもまったく同じ形の論証が成立してしまうのではないかと。

これに対して、論理学は循環しないという反心理主義からの再反論と植村が解釈

するのが以下の議論である。

たしかに論理学者の営みそのものが論理法則から (aus) の推論であるならば、論理法則の妥当性を証明するという論理学者の営みは、証明すべきことから証明すべきことを引き出すという循環に陥っていることになる。だが、われわれの合理的思考が論理的規則を前提しているということは、われわれの合理的思考がつねに論理的規則を前提にして、それから推論するものであるということではない。何らかの推論をするとき、われわれはその推論を支配する論理法則に言及することなくそれを使うこと（「論理的規則にしたがって (nach) 推論すること」）ができ、その場合には循環は生じない。(植村, 2017, p. 58)

「論理法則に言及」とも言われていることから、ここで述べられているのは命題の形で明示された前提として用いるか(aus)、そうではなく推論の形式としてそれに即しているか(nach)という区別であるように見える。じっさい、ここに付された

ハンナが指摘するように、自然演繹による証明という考えはまさにこの事実
に依拠している (cf. Hanna 2008, 40)。(植村, 2017, p. 58)

という注もそれを裏づける。

現代論理学の枠組みで捉えるならば、おそらく念頭に置かれているのは前提となる公理を命題の形で書くタイプの証明体系（いわゆる「ヒルベルトシステム」）と、推論規則の形でそれを実装する自然演繹の違いに相当するものであろう。

心理学（経験的学問）の場合、経験的に確証された法則（経験命題）： $(A \wedge B) \rightarrow C$ を使って仮定 A, B から C を導く推論は、ヒルベルトシステムでは

1. $(A \wedge B) \rightarrow C$ （経験命題）（前提）
2. $A \rightarrow (B \rightarrow (A \wedge B))$ （論理公理）
3. A （仮定）
4. $B \rightarrow (A \wedge B)$ （2, 3 と \rightarrow 除去則）
5. B （仮定）
6. $A \wedge B$ （4, 5 と \rightarrow 除去則）
7. C （1, 6 と \rightarrow 除去則）

という形になる。この場合、 $A \rightarrow (B \rightarrow (A \wedge B))$ という古典命題論理のトートロジーが論理公理として明示的に前提され、証明図のなかで経験命題と同等の振る舞いをしている。

これに対して自然演繹では

1. $(A \wedge B) \rightarrow C$ (経験命題) (前提)
2. A
3. B
4. $A \wedge B$ (2, 3 と \wedge 導入則)
5. C (1, 4 と \rightarrow 除去則)

という形になり、論理公理は明示的な前提としては現れない。

論理学の場合、トートロジー： $(A \rightarrow B) \rightarrow (A \rightarrow (A \wedge B))$ を古典命題論理の定理として導く推論は、ヒルベルトシステムでは

1. $(A \rightarrow (B \rightarrow (A \wedge B))) \rightarrow ((A \rightarrow B) \rightarrow (A \rightarrow (A \wedge B)))$ (論理公理)
2. $A \rightarrow (B \rightarrow (A \wedge B))$ (論理公理)
3. $(A \rightarrow B) \rightarrow (A \rightarrow (A \wedge B))$ (1, 2 と \rightarrow 除去則)

という形になり、論理公理 (図式)： $(A \rightarrow (B \rightarrow (A \wedge B))) \rightarrow ((A \rightarrow B) \rightarrow (A \rightarrow (A \wedge B)))$ と論理公理 (図式)： $A \rightarrow (B \rightarrow (A \wedge B))$ の事例 (つまり論理公理) が明示的に前提として現れる。

他方、自然演繹では

1. A (仮定)
2. $A \rightarrow B$ (仮定)
3. A (仮定)
4. B (2, 3 と \rightarrow 除去則)
5. $A \wedge B$ (1, 4 と \wedge 導入則)
6. $A \rightarrow (A \wedge B)$ (1, 3, 5 と \rightarrow 導入則)
7. $(A \rightarrow B) \rightarrow (A \rightarrow (A \wedge B))$ (2, 6 と \rightarrow 導入則)

という形になり、論理公理は明示的な前提としては現れない。

しかし、果たして循環の元凶となる公理を命題の形から推論規則の形で実装し、明示的に前提の集合に含めないようにすれば循環は解消されるのだろうか。先の引用で植村は「論理法則の妥当性を証明するという論理学者の営み」と述べている。つまり、ここでの課題は論理法則の正当化の問題であり、現代的に言えばメタ論理における健全性証明や無矛盾性証明に類する課題に近いと言えるだろう。

ところが、自然演繹の推論規則の形で形式化される推論で、矛盾を孕むものはいくらかでもある。単純かつ有名なものはプライアの **tonk** であり、自然演繹でのその導入則と除去則は以下のような形を取る。

A

----- tonk 導入則

A tonk B

A tonk B

----- tonk 除去則

B

こうした安全でない推論規則に暗黙にしたがっている(*nach*)としたら、つまりメタ論理である論理学に不健全な推論が混入していれば、このメタ論理中で健全性や無矛盾性が証明できても安心はできない。結局のところその推論過程自体が信頼できないのだから、信頼できない推論過程から結論としてお墨付きを得られたとしてもそれは何の安心材料にもならない。

つまり、いま使っている当の論理的原理をいかにして正当化できるのか、という意味では、命題の形で前提する(*aus*)のであれ推論規則の形で使用する(*nach*)のであれ、いずれにせよ循環の問題は発生する。

これに対して、「**tonk** のような明らかに人工的で不自然なものを用意するからいけないのだ、われわれが自然にしたがっている推論はそのようなものではない」という反論が思い浮かぶかもしれない。だがこうした言い逃れは不可能である。

というのも、カントール流の素朴集合論が採用していたいわゆるフルの包括公理図式は、われわれが自然にそれに従って問題がないように思われるにも関わらず矛盾が発覚した典型例だからである。包括公理図式から矛盾を導く方法は多々あるが、最も単純かつ有名なものはラッセルのパラドックスである。包括公理図式は自然演繹の導入則と除去則として定式化するならば、以下の ϵ 導入則と ϵ 除去則の形で表現

される。

$\phi(t)$
 ----- \in 導入則
 $t \in \{x | \phi(x)\}$

$t \in \{x | \phi(x)\}$
 ----- \in 除去則
 $\phi(t)$

これらの規則の $\phi(x)$ として $\neg x \in x$ を代入すれば、ただちにラッセルのパラドックスが得られる。

こうした、われわれに自然に思える推論に潜伏する危険な論理的原理を排除し、健全な論理的原理を正当化するのが論理学の課題だとすれば、論理学自身の内部で用いられる論理的原理を論理学自身によって正当化しなければならないという循環は常に問題となりうる。採用している公理や推論規則に問題があればいずれにせよその推論は危険な帰結を導くのであり、この点で形式化のスタイルがヒルベルトシステムか自然演繹かはほぼ関係がない。

したがって、植村への第一の質問は以下になる。

質問 1-1: *aus* と *nach* の区別はこのような理解でよいのか、もしよいとすると、その区別によっては論理法則の正当化の循環は解消されないのではないか。

では、一般にメタ論理による正当化の試みはすべて循環論法であり無価値かというところ、そうではない。

命題論理の場合、真理表による正当化もそのひとつだが、ここで注目したいのはダメット流の証明論的意味論である。

自然演繹においては、たとえば連言の導入則と除去則は以下の形を取る。

A B
 ----- \wedge 導入則
 $A \wedge B$

$A \wedge B$

----- \wedge 除去則 1

A

$A \wedge B$

----- \wedge 除去則 2

B

ダメット流の証明論的意味論では、導入則がその論理的語彙の意味を定め、除去則はそこから正当化されると考える。つまり、AとBとから $A \wedge B$ が導かれるのは「 \wedge 」とはそういう意味だからであり、 $A \wedge B$ からAが導かれるのはそれが主張されるのはAとBが共に主張できた時だと導入則が教えてくれているからである。

ここでポイントになるのは、それぞれの判断（命題）の根拠ないし証明の存在であり、これは志向と充実の相関関係によって志向性の特徴づけを行うフッサールの志向性理論、およびフッサールの論理学観とも相性が良い。

このような意味での理由を実際に把握しながら、それにもとづいて判断を下し、それによって知識を獲得することこそ、フッサールが「明証的な判断」ないし「認識」と呼ぶものに他ならない。(植村, 2017, p. 81)

少し整理して言い換えれば、認識とは、ある命題が真であることをその命題が真である理由の把握と共に判断することだ。(植村, 2017, p. 81)

とあるように、根拠を持った真なる命題のあいだの根拠づけ関係が論理学の主題なのである。フッサール自身の心理主義批判は、この観点から具体的に論理的原理の意味を心理学的法則と比較したものになっている。

たとえば、 $A \wedge B$ からAに決して思い至らないように人類全員の脳が改造されても（あるいはそのように進化したとしても）、それによって \wedge 除去則が妥当でなくなるわけではない。つまり $A \wedge B$ が根拠を持つならAは（人類が誰も気づいていなくとも）根拠を持って真なのである。

このように、論理法則・論理的原理と呼べるようなものは本質的に心理学的主張ではない。この点で、

『プロレゴメナ』における心理主義批判の標的は、心理学を基礎とした論理学ではなく、そのような論理学によって論理学の全体が尽くされるという考えである。(植村, 2017, p. 13)

という強調の仕方は、正しいがややミスリーディングである。問題は論理法則のすべてでさえなければ一部は心理学によって基礎づけられてもいい、という全称とその否定の争いではない。そうではなく、論理法則というのは本質的に心理学的主張ではないのであって、その一部であれ心理学的に基礎づけようとする試みは端的に誤っているのである。

こうした仕方では心理主義批判と、同時に論理法則の意味論的基礎づけが可能だとすると、心理主義と反心理主義の差は *aus* と *nach* には存しない。じっさい、植村自身が引用しているように、*aus* と *nach* の区別が現れる直前の

しかし我々は、そのように急き立てられた循環というものがじっさいにはどこに成り立っているはずであるのかをより詳しく見てみよう。心理学が論理法則を妥当なものとして前提する点にだろうか。(Hua XVIII, p. 69)

の箇所では、前提の *aus* と *nach* を混同してはならないと言われているのは「心理学が」論理法則を前提する場合である。文脈的にも、これに続く第 20 節では、反心理主義者が不利で心理主義者が勝者とみなされている、と述べられている。したがって、第二の質問は以下である。

質問 1-2: *aus* と *nach* の区別は、従来の反心理主義の論証の不備を認める文脈で心理主義と反心理主義がいずれも単純な循環論法になるわけではないことの指摘に用いられるのであって、心理主義者に対する心理学では循環になるが論理学は循環にならない、という反論にフッサール自身がコミットするために用いられているわけではないのではないか。

2. 『論理学研究』第二巻における同一性テーゼの意味と根拠

第二の論点は、フッサールの志向性理論の根幹を成す「志向的对象」についてのものである。植村は、著書序盤と終盤において挙げられる作業仮設 WH5 として、

フッサールが取っていた前提のうち、志向的对象と超越的对象の同一視については、その根拠は必ずしも明らかではない。(植村, 2017, pp. 15, 269)

と述べている。また、これは根拠が単に明らかでないだけでなく、同一視しない選択肢があり得ることも主張されている。

こうした点を踏まえると、フッサールが志向的对象を導入することで現象学形而上学的な含意を認める際に、そこで取ることができたもうひとつの可能性が見落とされてしまっていることが分かる。それは、志向的对象を(場合によっては存在しない)世界内の存在者とは別の、作用を超越したものとして考えるという立場である。実際、客観的認識論がもたらす形而上学的含意について、『論研』で述べられている見解を詳しく検討するならば、志向的对象の導入の結果こうした立場をとることも十分可能であり、少なくともフッサールはその可能性を考慮すべきであった。(植村, 2017, p. 261)

志向的对象が作用の部分に含まれないということは、その対象が(その背後に遡ることができないような)超越的对象であることをただちに帰結するわけではないのである。ここには飛躍がある。(植村, 2017, p. 260)

これらの箇所直前に付された注において参照される(植村, 2009)では、明示的にインガルデンの純粹志向的对象論を念頭においた上で以下のように述べられる。

フッサールは対象の二重化が維持不可能であることを徹底的に論じている。したがって対象の二重化は、仮定として用いることさえできないのではない。こうしたもっともな疑問は、実はそれほど強力な反論を構成するわけではない。対象の二重化に対するフッサールの批判が、もっぱら志向的对象を作用の实的要素と見なす立場に向けられていたことを思い出そう。この立場に対しては、フッサールの批判は有効かもしれない。(植村, 2009, pp. 12-13)

しかし作用に实的には含まれないが世界内の超越的对象とも異なるような「志向的对象」を考えるような理論には、フッサールの議論は決定的ではない、と。

だが、「志向的对象」と「超越的对象」および「(リアルな)世界」とは、それぞ

れ独立に設定された上でその一致不一致が議論できるような、そうした概念なのだろうか。

フッサールは志向と充実化の相関関係を基礎に志向性を考えている。志向的对象、つまり志向された対象とは、知覚を典型とする直観によって充実化が成されるときに、そこで与えられるものであり、何を元々の志向の充実化と看做すのかという我々の振る舞いによって分節化されるものである。「超越的对象」や「(リアルな)世界」という概念は、これとは別個に理解可能な概念なのだろうか。むしろ、「志向的对象」とは我々がじっさいの直観において何を充実化と看做し、何を幻滅と看做すのかという振る舞いの連関において定まるものであり、その性格が外的知覚の超越性と相関するものであればそれは超越的对象と呼ばれ、それが時間内部的な性格を持つ場合にはリアルなものと呼ばれ、それが確かに現実に充実化され確証されたときに現実的なもの、現に存在するものと呼ばれる、という仕方では、「志向的对象」概念を基盤にそこからその他の事柄が説明されるべきものなのではないだろうか。同一性テーゼはふたつの別々の仕方では規定された対象がじつは一致することを主張するものではなく、そもそも我々が超越的对象と呼んでいるものは我々の志向の対象に他ならず、「志向的对象」はそれが充実化による真理概念と相関的に考えられている限り、我々が超越的对象として考えているその当のもの以外ではその役割を果たせない、ということ述べているのではないだろうか。

つまり、第三の質問は以下になる。

質問 2-1: フッサールにとって「志向的对象」と「超越的对象」はそもそも独立に設定され一致しないことも可能だったかもしれない概念なのではなくて、意味上同じものしか指しえない概念なのではないか。したがってフッサールは、リアルな世界における超越的对象、というものをあらかじめ設定したうえで、志向的对象は実的ではないのだからリアルな方のそれだろう、というような乱暴な推論をしているわけではないのではないか。

そして、この疑問に否と答えるのなら、以下の問いを問わねばならない。

質問 2-2: いずれにせよ、もし「志向的对象」と「超越的对象」が分離しうるものだとすると、そのとき「志向的对象」、「超越的对象」、「(リアルな)世界」という概念はそれぞれどのような意味を持つものとして考えられているのだろうか。

文献

植村玄輝, 『真理・存在・意識 フッサール『論理学研究』を読む』, 知泉書館, 2017

植村玄輝, 「フッサールのノエマとインガルデンの純粹志向的对象 志向性理論から世界の存在をめぐる論争へ」, 『フッサール研究』, 第7号, 2009, pp. 4-14